

教育再生実行会議（第13回）議事要旨

日 時：平成25年10月11日（金）18：00～19：30

場 所：首相官邸4階大会議室

出席者：安倍内閣総理大臣、下村文部科学大臣兼教育再生担当大臣、有識者13名、遠藤衆議院議員、富田衆議院議員、世耕内閣官房副長官、櫻田文部科学副大臣、西川文部科学副大臣、富岡文部科学大臣政務官及び上野文部科学大臣政務官

○ 安倍内閣総理大臣より冒頭挨拶があった。

本日は、これまでの議論を踏まえ、高等学校教育と大学教育との接続、大学入学者選抜の在り方に関する第四次提言の素案について検討いただく。

高等学校と大学の接続については、これまでもさまざまな指摘がされながら、抜本的な改革が待たれていた。大学がペーパーテストのみによる選抜や学力不問の選抜を行うことによって、この貴重な時期に若者の能力を伸ばすチャンスを失うことがあってはならない。

大学入学者選抜については、能力や意欲を多面的・総合的に評価をし、判定する方向に転換していく必要がある。同時に、高等学校において、どのように教育の質を担保していくのかということも課題となっている。

大学入学者選抜の改革は、我が国の教育を方向づけていくと言っても過言ではない。子供たちや保護者に与える影響も大きいものがある。

委員の皆様には、これからの日本を見据えた思い切った改革と丁寧な実施に向けて御提言をまとめいただきたい。

○ 高大接続・大学入試の在り方について、提言の素案をもとに討議を行い、各有識者等より以下の発言があった。

（加戸委員）

○ 新たな試験の仕組みについては、短いタイトルで国民の理解が得られるようにしてもらえればと願っている。

また、獣医師の問題について、この提言に付録をつけていただきたい。公務員獣医師の必要性は、特にBSE等で苦慮している。四国の空白地帯に獣医師養成大学を誘致するため、12回連続して特区申請している。関ヶ原を分岐点として東に82%の定員があり、西は18%の定員しかなく、公務員獣医師、産業動物の獣医師が確保できない悩みを抱えている。ぜひ弾力的に入学定員を運用してほしい。

(鈴木委員)

○ 2000年4月に大学審議会がセンター試験の改革について提言している。それが棚上げになり、今日まで全く改善されていない。その時も1点刻み、一発勝負、センター入試の2回実施が提案されたが、大学側の負担、学校現場での問題など利害が相反して議論がまとまらず、唯一、センター試験へのリスニング導入が決まった。今回の提言では、現場等の反対を見越し、今後の在り方を変えるべく、しっかり提言していただきたい。

特に達成度テストには、マスコミ等も過敏に反応し、それによって高校現場は振り回される。そのため、非常に慎重に、かつ受験生にとっていい選択であるような形で検討いただきたい。実施は、なかなか難しい。よほどまとめて話し合わなければダメかなと考えている。

(佐々木委員)

○ 4点お話ししたい。

1つ目は、基礎レベルの達成度テストについては、将来的に高校3年間の各学年において、各学年別のそれぞれの達成度テストにするように検討することを提案したい。その理由は、米国で2014年から導入されるコモンコアでは、各学年で到達度テストを必須化しているためである。高校生が最も多く学力不振に陥る時期は高1の2学期。新聞報道で、この基礎レベルの達成度テストを高2の7月に実施とあったが、9月に学校と本人にデータが返ったとしても、その時点で学力的に厳しい場合は、そこから取り返すのが厳しいのではないかと思った。学校現場からすれば、各学年で必須とするのが望ましいのではないか。そして、子どもたちにとっても、学力不振に陥ったり、中退も一番出やすい時期である高1の時にもテストがあって、すぐに振り返ることができるようにするのがよいのではないか。

2つ目は、学生による授業内容・運営のスキルの評価も明確にし、効果的な教育が行われているかチェックする機会を作ることを提案したい。高校生や大学生だけでなく、先生も大きく意識を変えていかなければならない。『ハーバード白熱日本史教室』の著者の北川智子さんは、日本史というマイナーだった講座をハーバード大学でも人気のある講座にした。これは、先生が努力をされ、知的好奇心を刺激する、おもしろい授業を展開され、それを学生が評価した結果である。多くの先生からすれば非常にシビアなことかも知れないが、そういうことが必要なのではないか。

3つ目は、語学教育について、やはりなるべく早く、幼少期から学んだ方が外国語は自然に身に付くと言われている。実際に「臨界期」と言う時期を過ぎると、それ以後からの学習ではネイティブ並みの外国語能力の習得が難しくなるとも言われている。については幼児期から体系的に、公教育でも英語教育を実践していくべきではないか。

4つ目は、民間の会社の入社採用試験では、最初はペーパーで人を選ぶことがあるが、

面接やグループディスカッションを何回も重ねて、最終的には人物評価重視の採用を行っている。それを大学入試でやる場合、たくさんの受験生の対応をしないといけないので、実際、先生や大学の教授も大変かと思う。については、大学はOBOGや企業からの人材を活用してやっていけば、様々なノウハウもあるだろうし、その問題は解決するのではなからうか。

(八木委員)

○ 達成度テストの導入は賛成。しかし、基礎レベルの達成度テストは、高校生の学力担保が理由であり、希望参加型ではなく、できれば全員に受けさせたい。また、進級や卒業認定の参考資料としてはどうか。さらに、推薦・AO入試の枠が拡大し大学入試が学習の動機づけにならないから到達度試験が求められたこともあると思うので、推薦・AO入試には必ず到達度試験のあるレベルの通過を求めているかどうか。

発展レベルの達成度テストについて、国立大学の二次試験で学力試験はなくすと報道されたが、素案では丁寧な選抜による入学者の割合を大幅に増やすとされている。誤解が広がらないようにしていただきたい。

丁寧な入試は必要だが、既に大学は負担過剰であり、現実として出来るのかどうか。したがって、1点刻みの学力試験だけの大学に対し、東北大学のように丁寧なAO入試により優秀な学生をとる優れた事例などを示し、こういうことを求めるという事を打ち出すべき。

(貝ノ瀬委員)

○ 基本的に素案に賛同する。ただ、強調したい点について述べたい。

まず、本質は、未来を担う若者達の夢や志を実現し、世界に打って出られるように情熱や力を伸ばしていく、そのための大改革なのだということを再確認する必要があるのではないか。

それには幼児教育から将来への学びの連鎖を重視する必要がある。高校、大学などの関係者が毎日の学習活動、教育活動の改革にしっかり臨み、実現していくことが望まれる。

学びを連続させる評価の一つとして大学入試も考えると、高校の学びを丸ごと評価し、知識偏重の1点刻みの選抜ではなく、受験生の活動歴を丁寧に評価した選抜が必要であり、積極的に取り組む学校に国が補助金等で支援することも大事ではないか。

また、到達度試験は、基礎共通レベルと発展レベルと2段階で考えることも必要だろうと思う。センター試験のノウハウも生かす必要がある。それをなくすのはもったいない。試験の運用面で文科省の局の縦割りも指摘されている。一体的に行うことが大事。

学びの連鎖を確保するためにはキャリア教育の充実、大学教育の可視化が重要であり、高校時代の夢や志を記録、蓄積するポートフォリオ、といった取組みも必要であると思う。

最後に、大学の教育情報について、高校生が主体的に興味関心を持って情報を得られる、

将来の学びを考えていく上で、大学のポートレートと言われるような大学による積極的な発信があってもいいのではないかと。国が共通の枠組みを整理し、データベース化を進めることは高校の進路指導にも生かせる意味でも大事ではないかと。

(蒲島委員)

○ 3点述べたい。

ひとつは、大学教育の重視と大学院修了者のキャリアパスの開拓。これには、産学官連携がとても必要だと思う。

2つ目は、大学入学後の進路の変更が柔軟にできる構造への転換。

3つ目は、短大に入ったり、専門学校に入った人達が、将来、4年制大学に進学や編入学が可能な制度。

今日、ここに来る前にアメリカの政務担当公使の方に出会った。高校時代に熊本に留学され、イェール大学に入り、その後プリンストンで全く違った分野でPh.Dをとられ、今は外交官として成功されている。そういう多様性が大事ではないか。これらの仕組みの実現は、今後の日本の社会の在り方にも大きな影響を与えるのではないかと。

特に、修士号、博士号取得者が重用される社会の構築が日本の発展に大きな役割を果たすと確信している。この素案が成案となったなら提言の実現に向けて推進していただきたい。

(安倍総理)

○ 今回の高校学校と大学の接続は、小学校からの全部の学校段階に大きな影響を及ぼすといってもいいと思う。さらに、大学院の修士、博士と続いて、社会人になっていく道にも、大きな影響があるのだろう。

その意味においては、今回、素案においても野心的な、かなり抜本的な改革が入っている。今後、皆様にまとめていただいたものを、我々もしっかりと実行していきたい。

(川合委員)

○ 学びを大学につなげていくこと、入試が間に入って、そこが目標にならないようにという意味で我々の議論のエッセンスがうまく入っている提言だと思う。

高度人材を育成する目的のところ、日本で今弱いのは博士号取得者にもっと広く社会で活躍いただくこと。博士号取得者のキャリアパスの開拓を積極的に進め、社会進出の促進を図り、パスが生かされるように言及していただけるとよろしいかと思う。

あと、割合を増加させるという文言がある。精神はわかるが、何となく数値目標を想像してしまう。実際に数値目標が出てきていいのかという心配があるので、少しマイルドに、しかし、エンカレッジする表現がよろしいかなと思う。

到達度試験に関しては、やはり全体に課しないと効果は薄いかと思う。

(河野委員)

○ 現在の高校でも生徒に応じて幅広く柔軟な教育を目指している。その結果、様々な高校があり、学力を含めて多様な生徒がいるのが現状だろう。基礎レベルの達成度テストの創設に当たり、高校教育の全体的な学力向上という目的は賛成である。その時、高校の実情、ニーズも踏まえて、実施教科、その教科の達成目標を丁寧に検討する必要がある。この目的が共有されなければ参加を希望する高校や生徒がどれだけ出てくるか、懸念がある。

発展レベルの達成度テストの大括りと複数回の実施については、括りの境界は最終的には1点になる。その1点の違いで、A判定かB判定に分けられるのではないか。仮にA判定で、高校生活で多様な活動をして意欲的であった生徒が志望大学で残念な結果となり、もう一回チャレンジしたい場合、この生徒は高校生活での活動を振り返ることが出来ない。では、指導する者はどこを頑張れと言えればいいのかという意見が出てきそうな気がする。

もう一つ、100点満点のテストで20点刻みのA、B、C、D、Eとなった時、子供が90点を取ってAだからオーケーというより、100点目指してしっかり身に付けてくれよと言いたくなる。A又はBでオーケーという部分で、テストに対する意識、モチベーションに影響を与えるのではないかと思う。

また、大学入試センターのノウハウを生かすとしても、現行でも運営負担の増大という指摘がある。試験で課す教科・科目を勘案しても、複数回なら業務の増大も考えられる。提言で一番強調すべきは、大学がアドミッションポリシーに基づいて創意工夫のある入学者選抜に取り組むことだと思う。入学後の厳格な成績評価、卒業認定を行い、責任を持って目標とする人材を育成するという意識改革を大学に求めることが大事ではないか。

(武田委員)

○ 多様性のある制度について評価の仕方など細やかに配慮が盛り込まれているので、素案が提言として成立したときに期待している。

強調したいのは、未来を担う子供達に、受験を突破する理由以外になぜ自分は勉強するのか、し続けなければならないのかという自問自答のきっかけになればと思う。

特にスポーツ選抜やAO入試に関して、基礎レベルの達成度テストは全員参加型がいいのではないか。スポーツを一生懸命すればするほど、勉強しなくてもスポーツをやっていれば生きていけるとか。しかし、それは難しく、引退後の人生の方が長いに関わらず、学力が全然付いていない中で突然引退したら、社会として活用されない。日本では、スポーツ選手の活用は肖像権でしか使われていないのが現実ではないか。そのため、スポーツをやっている者が意識を改革しなければならないのではないかと思う。

例えばスポーツを通じた地域への還元、高校生の段階で地域のスポーツ少年団に指導に行く、地域との結びつきも学べるし、大学受験の時に自分はこういう人間でこんな風に役

に立てたのだ、自分を肯定する高揚にもつながるのではないかと思う。プラスして、ある程度の基礎学力が身に付いていないと、やめてからの人生設計、セカンドキャリアに迷いが生じてしまう。最低レベルをしっかりと担保すべきではないかと思う。

(遠藤衆議院議員)

○ 大学入試改革をやるのは、今のセンター試験がうまくいっていないから。なぜセンター試験と同じような新たなテストをもう一回やる必要があるのか。高校在学中に複数回受験できる希望参加の基礎レベルの達成度テスト、これを全員参加型にし、それを何回かやることでクリアできないのだろうか。かたや高等局、かたや初中局などということではなく。

自民党では、センター試験を廃止して、到達度試験を導入する形でまとめた。なぜ到達度試験を2つの仕組みでやらなければならないのか。なぜ1回で出来ないのか。また、発展レベルの達成度テストを複数回やる、大括りにやるだけで、なぜ何回も何回もやるのだろうか。この点について私は賛成できないと思う。

AO入試については、TOEFLのいろんな提案をしたが、小さい頃から英語だけの授業でスタートするという方が理解は早いということについては、佐々木委員と一緒に意見。

大学の負担は、確かに重いと思うが、分かり難いのは、うちの大学はどういう人間が欲しいか、はっきり明示すればありがたいのではないだろうか。そうすると、うちの大学は到達度試験の中のこの部分とこの部分とこの部分を参考にして、又は、元にして採用しますということが出来ると思うので、ぜひ検討いただきたい。

(鈴木委員)

○ テスト1回で足りるという意見が出たが、実は私も基本的に賛成。基礎レベルの達成度テストは、教育の改善に活用すると言うが、それはどこの学校でもやっている。民間の模試がいっぱいあり、政府が大きな金をつぎ込まなくても、それはやれる。学校はそれぞれの形で教育現場の改善に生かせるのだろうと思っている。

また、一番の問題はAO・推薦で安易に半分以上の生徒が大学に進学している実態があること。こんなことがあるのに勉強に身を入れてやろうという気は起こらない。だとすれば、やはり一本化されたセンター試験、発展レベルの達成度テストの中でやればいい。時期の問題が出てくるが、複数回受験の中で授業を配置して考えていけばいい。また提言しても議論が元に戻ったり、繰り返されたりしてしまいかねない。

だとすれば、一番明確なのは、AO・推薦を含めた受験生のレベルアップとか、高校生としての基本的なものをやらなければダメだと思う。

もし基礎レベルの達成度テストをやるのであれば、やはり悉皆でやるべき。それぐらい投げ込まないと日本の高校教育は変わらない。その時、有名私立・有名進学校の子が早々に成績をとり、後は知らないということになる恐れもある。学校間の格差は不安なところ

もあるが、やはり発展レベルの達成度テストを統一的な試験にして時期を考え、その中で実施していく。大学はその中から選ぶのが負担も軽減する。

センター試験を超える試験問題は多分つくれない。それを切り捨てるのはもったいない。

(遠藤議員)

○ 達成度テストの基礎レベル、発展レベルの2回ではなく1回でやればいいではないか。別に入試センターのノウハウを使うのが悪いと言っているのではなく、今のセンター試験を止めて、到達度試験で一体的にやると。今までのノウハウを到達度試験に生かせば、一体でいいのではないか。

(八木委員)

○ 問題は、センター試験を受けない人達の学力の担保。そのための学習の動機づけのための基礎レベルの達成度テストは、できれば全員に受けさせる。ただ、到達度試験も幾つかレベルがある。基礎もあれば発展もということで2種類あり、丁寧な制度設計が必要だと思う。

(曾野委員)

○ 私は根性の悪い性格をしているせいか、こういう文章を拝読して、目を覚ましたいと思っているが、目が覚めない。大切なことは全部書いているわけだが、ここにあるのは親切過ぎる教育という感じなのだ。

親切がない教育よりは親切過ぎる教育のほうがいいとは思う。しかし、昔英語で習ったアクティブボイスとパッシブボイスで言うと、英語の場合、受け身をつくるのはとても難しく、私はしばしば間違えて点をもらえなかったが、我々はアクティブに自分が自ら行って取ってくるという姿勢がないと自分を鍛えられない。ここに学生の能動的な活動と書いてあるが、能動的になるように教育されていない。ずっと受け身だ。ここにもあるが、本当に一例だが、教育プログラムの実施は産学官の提携などをすると、お坊ちゃま用、お嬢ちゃま用に万事用意をし、そして、インフォメーションの足りないところをさらに与えるという調子になる。教育はもっと意地悪をしないと入らないと思っている。

こんなことを今さら言ってもどうということはないが、これから何となく現場において、もう少し厳しい、自分で行って取ってこい、探してこい、本を見つけてこい、あるいは誰かにお願いして情報をえなさいというような、学生達が自ら方途をつくるということをやっていただきたいと思う。殊に、高校と大学は違い、大学というのは与えられた教育を受けても全くどうしようもない。社会的には大学を出ることによって意味があるかもしれないが、大学を出るということは、自分で問題を探して、自分で解決することであり、その辺のところをどこかに盛り込んでいただけたらと思う。

(貝ノ瀬委員)

○ 基礎レベルの達成度テストは、高校の学習・教育活動を丸ごと評価しなければいけない中で、ほとんどの子が高校に行くが大変な格差がある。その中で高校の質を上げていかないと無責任だと思う。

大学入試だけでなく、高校生全体のレベルも上げるために、小中学校の学力調査みたいなものを行うとなると、基礎基本の到達度はどこまでかを考えないと出来ない。高校でも基礎レベルの達成度テストを基礎基本に絞ってやる。指導の改善などに生かすように学校にフィードバックする。質保証も同時にやらないと、選抜だけやっても十分ではないのではないか。

(遠藤議員)

○ 同時にやることは賛成。同時に組み込み、いろんな機器のテクニックにより両方を例えば基礎編、応用編として一体的に評価できる方法で、1つの試験を複数回やる。それを何回かやる中で大学入試にも使えますよ、到達度も評価しますよ、と出来ないのか、そこが理解できないので賛成できない。

(川合委員)

○ レベルの違う試験を1回の試験で実施するのは、現実的に難しいと思う。達成度を評価する試験と、アドバンスステージの試験は1つで出来ないのではないかとと思うが、可能だろうか。

(遠藤議員)

○ 1回の試験の中でAとBとCとかいろいろ組み合わせがあつていいと思う。しかし、それを再度センター試験でやる必要はないのだろうと。全体を入試センターのノウハウを生かしてやるというのは別に到達度試験で悪いと思っていない。

(川合委員)

○ 1回の試験のなかで、複数のレベルの問題を与え、どれを解くかを定めることになるのか。2回に分けた方がシンプルだと思った。質保証をする部分は全員が受ける。アドバンスト・ステージで次につながっていくものは、必要に応じて受けるという考え方は、整理されていて、分かり易い構造ではないか。

(鎌田座長)

○ レベルの問題と使用する目的の問題、もう一つはどの段階でやるかの問題がある。高校1年生には1年生の達成度テスト、2年生には2年生の、と設定することで、高校の側

だけではなく、本人の学習目標を見直すことができる。これら3つの点で、2種類が必要なのか、又は最終段階で1つの試験をすればいいと考えるかで意見が分かれていると思う。

(遠藤議員)

○ 高校1年から達成度試験を受けるのは、それはそれでいいのだと思う。ただ、私達は大学入試の改革案として達成度試験を議論していたので、高校の2年、3年で何回かやり、選ぶという感覚だった。

(川合委員)

○ 達成度試験は高校の質保証と私は思っていたので、どちらかという違う考え方だったのかもしれない。

(遠藤議員)

○ 高校1年から達成度試験をやるなら、それは質保証だと思う。あくまでも大学入試を達成度試験で改革していくという形で、高校2年、3年の達成度試験から大学入試に利用していく捉え方をしていた。もう一回整理してみるが、そういう感覚でいる。

(八木委員)

○ 例えば都立高校はいろんな高校があり、多様である。しかし、文部科学省の学習指導要領は1種類しかない。したがって、東京都教育委員会は、指導要領を元にして、これだけは身に付けてほしいものを独自に何段階かつくっている。そういうところから、英検の1級や4級という感じで、例えば何々大学のAO入試、推薦入試を受けるには、到達度3級の合格が必要とか、そういう活用の仕方はある。そのため、到達度試験についても、いろんなレベルを設けるのが現実的で効果的なのかなと思う。

(加戸委員)

○ 基礎レベルの達成度テストについては、理科ならば、1年の生物、2年の化学、3年の物理をとるとして、3年の時は生物の試験をしないので、1年の時の生物の評価をどうするかという話で、中学校の学力テスト的なものと理解していた。入試に使うかは、使うほうの勝手。例えばTOEFLは入試のためにあるのではないが、入試に使う大学もある。

理想を言えば、発展レベルの達成度テストは基礎レベルの達成度テストにだんだん近づくべきと思う。結果的には何年か経ったらもう一つでいいと。つまり、大学入試によって高校が歪められないこと、学習指導要領で教えたことが達成されること、それが最高の目標で、今はそういう方向へ向くためのステップと理解している。

(富田衆議院議員)

○ 達成度テストの創設を公表した場合、高校側も高校生も負担が増える。大学がこんな事を出来る訳がないと、それぞれ負担増に嫌気がさすのではないか。加戸委員が言われたように接続していくのであれば大丈夫だと思うが、少し心配に思う。

司法試験は1点で切って500人というのが40年以上続いた。司法制度改革で2,000人まで増え、司法界は崩壊した。レベルダウンも甚だしく、改革が良かったのかという議論に戻る。1点で切ることの大事さと難しさ、子供達に負担にならない制度設計は難しいと思う。

蒲島委員が言われるように、いろんな能力が発揮できるのは、その子によって段階が違う。高校、大学、また修士と、いろんな時にいろんなチャンスがある制度設計ができる提言をしていただけるといいなと思う。

大竹委員のシンポジウムの新聞を読み、心に地球儀を、と言われていた。グローバルといっても、小さい時に何をグローバルな視点にするか。大竹委員のスピーチを聞いて、心の中に持っていればいつでも考えられるのだという、これからのひとついいキャッチフレーズになると思った。

(大竹委員)

○ もう本当にすごく難しいテーマだということはよくわかった。答えになっていないが、極めて慎重に進めていただきたい。

(鎌田座長)

○ 到達度試験について委員の皆様のイメージが多様に分かれているということがわかった。読み手にとって受け止め方がさまざまになる提言だと問題がある。その辺のところを明確にしながら議論を詰めていきたい。

仮に2つの試験をイメージするとしても、遠藤議員が話された、こちらの試験はこちらの局、こちらの試験はこちらの局みたいなことにはならないで、一体的に考えなければいけないことを提言で表現できるように工夫していきたい。

(遠藤議員)

○ 大学の負担が一番多いという話だが、自分の大学はこういう人間をとる、到達度試験のこれとこれは採用しますと、多面的な活動も含め、大学ははっきりさせる必要があるのではないか。せっかく到達度試験をやっても、大学入試には用いませんとするのでは何回もやるのは大変。こちらでも何回、こちらでも何回で本当に出来るのだろうか。一体とした形では出来ないのだろうか。

(川合委員)

○ システムは統一して1個であるのはすごくわかりやすいと思う。複数のレベルの問題をつくり、同じフレームワークの中で実施する。この試験は、何回でも受けられるようにするのが一つの解ではないか。結構多くの問題をつくらないといけないこと、また複数回受験してステージアップを図るという意味では複数の試験を実施するのと同じという気がする。

(貝ノ瀬委員)

○ 基礎レベルの達成度テストは、いわゆる高校版の学力調査のことと受けとめていた。義務教育でも学力調査をやっており、東京では市や区でも独自にやり、都教委もやり、国も参加したり、3つ4つやっている。その上で、受験する子は受験準備もしている。高校の学力調査についても特段の負担を強いることにはならないのではないかと。学力調査を指導の改善に生かし、学習活動でインセンティブを高めるのに使ったり、個別指導に使ったりしている。

そのため、入試には活用せず、指導に生かすということでまとめたのではないかと。ただ、2つの達成度テストが並んでいるので一緒のものというイメージになり、受験生に負担をかけるというイメージになっているのではないかと。

(武田委員)

○ 私も貝ノ瀬委員と同じ理解。私は高校にスポーツ推薦で入り、スポーツクラスという、学年に1つの同じクラスで3年間でやっていた。

その中で、模試を受けたら、難しくて、自分のクラスでやっていた内容と全然合致しない。多分私達のクラスは高校生の中に到達したいところまで行ってなかったことが自分でわかる。

そういう意味で、基礎レベルの達成度テストは、例えばAO入試で学力不問の状態を改善するために、どんな環境でも絶対に超えていないといけない到達度を測る学力調査と思っていた。

(鈴木委員)

○ 基礎レベルの達成度テストは下におりていった場合に議論がまとまらないのではないかと。方向性を見定める必要がある。高校では、生徒達の学力の目標はつくり、やっている。そこに国が統一的な形でやると、そのための制度設計、システム、人員、費用、問題の作成、実施の期日、後で考えろとは言ってもどうするのだという問題が出てくる。その辺が難しい。小中学校で学力テストをやっている、なぜ高校の学力テスト版が出来ないのか、それは出来る。

言い訳だが、小中学校で学力テストがどう教育現場の改善に生かされているか、そこを文科省に聞きたい。やっても学校に結果だけ投げて、あとは自分達で判断しろと任されていないか。

遠藤議員の言われた形での到達度テストをやり、その中に段階を設けながら大学にも利用できる、学力もできる、しかも希望参加という形が無理ないところを感じる。

英語教育については、過疎で生徒が減少し先生もぎりぎりの所でどう勉強させるのかといったとき、学習環境作りの問題が出れば、それが上まで響いてくる。やはり日本の津々浦々でサポートできる人材を幅広く獲得しておくシステムが必要であり、高校生も、大学生も、リタイアした人も、主婦も使うという形で意識づけしていけば、高校教育も大学教育も国民の意識もかなり変わっていくのかなと思う。誰が指導し、誰が補助するのか、学校の先生だけでは心許ないなと思った。

(曾野委員)

○ お聞きしたいが、細則をどんどんつくっていくと、必ずそこに不満というものが出てくる。その不満にどのように解決して耐えるかというところは、どこでやるのか。

(貝ノ瀬委員)

○ 少なくとも私の知る限り、小中学校の学力調査をただ学校に返してそれっきり、あとどう活用されているかは知りませんという自治体はないと思う。教育委員会が学校側と一緒にあってどう学習指導を改善するか、自治体は鋭意工夫してやっている。

全国的に一生懸命やっている。その改善も生かされてきているので、少しずつ学力も上がってきているということが言える。高校の質保証でも参考にしていけないのではないか。

(遠藤議員)

○ やはり到達度試験のイメージが食い違っているという気がする。大学入試の議論の中の到達度試験ではなくで、小学校6年と中学校3年の学力調査を高校でやるのは、また別の議論だと思う。高大接続・大学入試という議論の中で、到達度試験の認識が違っていると噛み合わないところがあった気がする。

もし小中学校のような形の試験をやるというのなら、それはそれで別の評価があると思う。ただ、悉皆でやるのは大変であり、高校1年生でやり、2年生でやり、大学受験は別と。本当にここまで出来るのかどうか。

(鎌田座長)

○ 具体的な試験の実施方法・内容にまで踏み込んで提言すべきか。

少なくとも、高校教育の到達度を適正に評価する試験が入学者選抜に使われなければい

けないという点では、委員の考え方は一致していると思う。

しかし、幅広いレベルの生徒に対応する試験だと難関校の選抜に使えず、逆に難関校の選抜でも使える試験では多くの人にとっては難し過ぎて、やる気を削いでしまう現実がある。こういう中で、到達目標を設定し、そこに向かって高校も生徒も頑張るような試験のイメージと、入学者選抜に使えるような試験のイメージは違うかもしれないというところから、2つの試験を想定する議論に発展してきた。1つの試験の中でうまく選択させれば、両方の要請は満たせるかもしれない。ある意味では技術的に検討すべき課題かもしれない。

(蒲島委員)

○ 大学入試の一発勝負では、全てがわかるわけではなく、大学入試でわかるのは18歳の時にどれだけ成長しているかどうか。20歳の時に成長するかもしれず、30歳の時かもしれない。

短大に入ったけれど、実際やってみたら天才的なものだった。事例だが、最初に短大に入って、兵隊に入ったら、お前は優秀だからといって、それからハーバードに行く、そういう編入学もある。世間的には最初のランクは高くないかもしれないが、そこで異常な才能を発揮する人がいる。学部で完結してしまうと、そういう人の能力を発見する舞台としては短い。大学院まで行った人も社会が迎えるシステムが大事。一発の入学試験で間違いない選択というのができればいいが、永久にできないだろう。だから、間違っただけかもしれない人達をどう社会に生かしていくか、そういうシステムをつくるのが大事。私は、最初の入試をアメリカで受けた時、試験は不合格だったが、知っている先生が強力に推薦してくれ、1年間、様子見に入学できるようにしてくれた。このような弾力性が大学側に必要なのかなと思う。

(河野委員)

○ 大学の個別の試験の在り方も大事になるのではないかと。必要とする人材をどう獲得するか、大学はそれぞれ違ってよく、合否の判定、その在り方を大学もしっかり考え、うちの大学はこういう人材を育成するのだ、そのためにこういう個別の試験をするのだとアナウンスすることが大事。その中で、発展レベルの達成度テストについては、現行のセンター試験をイメージすれば、マークシートのものになると思うが、個別の試験では記述試験も学力を測定する上では必要であり、論文や面接や推薦書等々だけで判定するのは難しいのではないかと。個別の試験は大学が考えていく必要がある。

(鈴木委員)

○ 熊本から海外に派遣される生徒が、蒲島委員の話に感銘を受け、勉強しよう、英語は本当に必要な、自分で夢を果たすことは大切だなということ学ぶ。

高校、小中学校、塾予備校にもいろんな先生がいるが、生徒たちに多くの夢や希望を語ることでできる学校づくりをしなければダメだと思う。先生方の意識改革はそういうところにあり、子供達はそれで影響され、それで伸びる。

(加戸委員)

○ 基礎レベルの達成度テストについて議論があったが、私は53年前に文部省の学力テストの時に法的根拠を担当した係員だった。あの時の文章と提言素案がそっくりな感じがする。当時は日教組の猛反対で悪戦苦闘して途中で潰れた。戦後レジームから脱却したのかなと思っている。

提言素案には、中教審で検討することを期待するとある。ここで出た議論は中教審で議論いただければよいのではないか。それが結論ではないか。

(鎌田座長)

○ 大学もアドミッションポリシーに従ってさまざまな観点から受験生を見ていきたい、ペーパーテストの1点刻みのテストだけで選ぶのは限界があることを意識して、多様な、総合的な選抜をするが、逆に最低限の学力保証は必要だという意味で実行会議の議論に期待している部分もある。大学も実行会議の動きと合わせて選抜方法を変えようとしている。

試験で成績のいい子を入れれば、あとは自分で勉強するという人ばかりが大学生ではない時代になった。そういう中でどうやって高校で最低限の能力を身に付け、それも知識偏重ではなく、考える力を身に付ける方向に誘導するには、大学入試なり、統一試験がどういう役割を果たすか、大学側から見ても大きな課題になっている。

1点刻みの公正さを求め続けると、最後はマークシートしかない。1点刻みではないものという考え方は、1点刻みになじまない記述式のような主観的な試験が試験制度の中に入ってきていいという意味もあるのではないか。多角的な能力判定ができる入学者選抜制度に向けての検討を提言し、詳細は中教審等で詰めて検討していただく。こんな方向にしたいと思う。ただ、誤解のない提言とするために、この後、委員の意見を伺いながら事務局と相談して修正させていただきたい。

(下村文部科学大臣兼教育再生担当大臣)

○ 最も象徴的な厳しい試験として中国の科挙があるが、今の日本の公務員試験も科挙に似ている。しかし、国家公務員の試験でも、今は、まず定員の3倍位まで学力でとり、その後面接等で3分の1に絞る。学力で受かった人全員が国家公務員になれるわけではなく、実際になれるのは3分の1という仕組みに既になっている。

先日、大企業の社長と話をした時、そこは何万人という希望が来るので、まずは5,000人位に絞り込む学科試験がある。それでおしまい。それから5回も6回も面接して、最後の

役員面接の時に初めて出身大学を調べる。最終的に採用するのは100人や200人。大学のブランドで選ぶ企業は生き残っていけない。つまり、学力だけではなく、社会における能力はそれ以上の、それ以外の能力が求められる時代に来ている。それを大学側もよく理解し、その能力をさらに高めるため、素養のある人材を入試でどう選別するか、学問の府でも学力一辺倒だけでいいのかということ、素案で示されている議論があったのではないかと。

大学入学者選抜を変えることは、大学教育や高校以下の教育を本質的に変えることにつながる。国民的な関心は高く、私も今日、大学入試についてNHKの番組に出る。

素案にあるように多面的、総合的に生徒の意欲、能力、適性を丁寧に見て、その持てる可能性を認め、積極的に評価していく大学入学者選抜が、これからの時代を見据えた教育再生にとって重要な方向性であることには共通認識が得られたのではないかと思う。

将来の世界や今後の日本を展望したときに、各大学は、どういう人材をどのような教育によって育成するのか、真剣に再検討し、アドミッションポリシーを示す必要がある。また、そのような改革に真剣に取り組む大学には、国としてもインセンティブを提供し、促進することも必要だと思う。

個々の大学のやり方は大学側の判断になってくるが、この素案に、本日の議論、意見を踏まえて修正を加え、ぜひ次回の会議で第四次提言として取りまとめ、方向性を示していただき、詳細は中教審等で議論していただきたいと思う。

また、既に第二次提言で教育委員会制度の在り方について方向性を示していただいた。その後中教審に諮問し、具体的な法制化に係る事項について審議をしていただいております、審議経過報告が取りまとめられたところ。この報告では、教育長を地方教育行政の責任者にするという本会議の第二次提言を具体化するために、最も抜本的な改革案として、教育についての最終的な権限を首長に移し、教育長を首長の補助機関として日常的な教育行政の責任者とし、教育委員会を首長の附属機関とする案が中心的に示されている。

この案については、教育の政治的中立性の確保等に関して検討すべき課題があるとの意見もあり、教育委員会を基本方針等の限られた事項のみ決定する、性格を改めた執行機関とし、教育長は教育委員会の補助機関とする案も議論されている。今後、これらの案について、さらに関係各層の御意見を伺いながら集約を図り、年内に答申をまとめていただき、来年の通常国会に所要の法律案を提出したい。

○ 座長より、今後、本日の意見を踏まえ、更に委員と調整を行い、次回の会議で提言をとりまとめたいこと、そのため、文案の修正等については、自分と事務局とで相談しながらこれを取りまとめていくという意味で自分に一任をいただきたい旨の発言があり、了承された。